菊池一族

菊池一族は、日本の中世を通じて九州で重要な政治的役割を果たした有力な武士集団である。一時は全国の政治に影響を及ぼすほどの勢力を誇った。一族の本拠地は、現在の菊池市である城下町・隈府であり、菊池氏が敵対する武将に滅ぼされてから数世紀経った今でも、500 年に及ぶ歴史の遺産が色濃く残っている。

菊池氏はどこから来たのか？

菊池一族がいつ、どのようにして成立したのか、多くの詳細は歴史から失われてしまったが、その成立は伝統的に 1070 年とされている。この年、九州の行政の中心地であった大宰府（現在の福岡近郊）に赴任していた高官、則隆が現在の菊池地方に到着したと考えられている。則隆は菊池姓を名乗り、後に菊池川となる川沿いに屋敷を構え、城下町・隈府の基礎を築いた。

菊池地方は僻地であったが、稲作が盛んな農業地帯であった。則隆とその子孫は菊池川での交易を独占し、日本有数の農地に発展させた周辺の平野部で栽培された作物を販売することで富を得た。

認められざる立場

則隆の時代から約 100 年後の 12 世紀後半、菊池氏は日本の歴史に新しい時代を切り開く争いに巻き込まれた。源平合戦（1180-1185）では、長らく朝廷の覇権を争ってきた平氏と源氏の武家が、天下の支配権をめぐって争った。全国の武家はどちらかを選ばざるを得なかった。菊池氏は当初源氏を支持していたが、戦争の最終段階では、主に九州の武士で構成されていた、苦境に立たされた平氏軍と同盟を結んだ。

源平合戦は源氏が勝利し、彼らはその後、日本で最初の武家政権である鎌倉幕府を設立した。鎌倉幕府は東日本を本拠地とし、同じ地域の勢力を後ろ盾として、かつての敵であった菊池氏をはじめとする九州の諸氏を疑いの目で見た。

菊池氏と幕府の間の不信は長引き、13 世紀後半にはさらに悪化した。朝鮮を征服したモンゴル皇帝のフビライ・ハンは、1274 年と 1281 年に日本への侵攻を開始した。日本の武士たちは派閥の忠誠を捨て、この侵略者を撃退するために戦った。当時の当主であった菊池武房（1245-1285）は、その戦場での勇猛さが特に称賛された。しかし菊池一族は、幕府が戦利で彼らに報いることをしなかったことに失望の念を抱いた。

脚光を浴びて

14 世紀初頭、鎌倉幕府の支配力は弱くなっていた。幕府は外敵から日本を防衛するために資源を費やす一方で、地方の武将と朝廷を統制する難しさに直面していた。後醍醐天皇（1288-1339）は朝廷に権力を取り戻す機会を察知した。

後醍醐は、菊池氏を含む幕府に不満を持つ武家と同盟を結び、1331 年に幕府に対する乱を起こした。1333 年、菊池氏は他の九州の武士団とともに、幕府の出先機関がある博多（現在の福岡）を攻撃した。しかしその矢先、菊池一族は同盟を組んだはずの武士に裏切られた。多勢に無勢で死を覚悟した当主菊池武時（1292-1333）は、息子の武重（1307-1341）に菊池に戻るよう命じ、幕府軍に決死の突撃を仕掛けた。

武時とその部下たちは戦死したが、彼らの大義は勝利した。菊池の博多攻め失敗からわずか数ヵ月後、鎌倉は後醍醐側の軍勢に滅ぼされ、幕府は廃止された。勝利した天皇は菊池氏の忠誠に報いるため、武重を肥後国（現在の熊本県）守護とした。菊池氏はこの名誉ある役職を約 200 年間務めた。

南朝の忠臣たち

後醍醐天皇が朝廷による直接統治を復活させようとした努力は短命に終わった。天皇の改革は鎌倉時代以前の貴族社会と政治体制への回帰を目指したが、この政策は武士階級の大部分を敵に回した。鎌倉幕府が倒れてからわずか 3 年後の 1336 年、かつての鎌倉武将で後醍醐の盟友であった足利尊氏（1305-1358）が京都を占領し、新たな武家政権である足利幕府を創設した。

尊氏は自分の意のままに新しい天皇を立て、後醍醐は都から逃げ出し、京都の南、現在の奈良に近い吉野に対立する朝廷を作った。このような出来事から南北朝時代が始まり、対立する朝廷が国の支配権をめぐって争った。

菊池氏は九州の他の多くの武家と同様、南朝に忠誠を誓った。後醍醐天皇は、九州の支持者を天下奪還の鍵と考え、既存の同盟関係を強化し、新たな同盟関係を築くために、幼い皇子、懐良（かねなが）親王（1329-1383、菊池以外では「かねよし」と呼ばれる）を九州に派遣した。

懐良は 1348 年に隈府に到着し、城主の菊池武光（1319-1373）と会談した。この出会いが、菊池氏最大の繁栄期の幕開けとなった。それからの 10 年間、懐良と武光は九州を拠点とする武家による強力な同盟関係を築き上げ、九州全土で北朝派を押し返した。これらの成果は、1359 年の有名な筑後川の戦いで頂点に達し、菊池氏は北方の大軍を決定的に破った。翌年末までに、

菊池氏率いる南朝方の支持者は九州全域を支配するようになり、同盟の本部は、菊池氏の創設者である則隆が 300 年ほど前に出発した太宰府に移された。

勝利した後、菊池一族は守りを固めたが、南朝が勝利した九州の武士に吉野を訪問するよう要請したことが災いを招いた。菊池武光が率いる艦隊は九州から出帆したが、北朝軍に迎撃され、敗走した。武光は太宰府に戻ったが、足利幕府は九州の脅威に対処するため、新たな軍将として名高い戦略家、今川了俊（1326-1420）を派遣した。

了俊は 1372 年に菊池氏率いる南朝軍を大宰府から追い出し、翌年の武光の死は菊池にさらなる打撃を与えた。最強の将軍を失った懐良公率いる南朝軍は、九州の奥深くまで押し込まれた。1383 年に懐良が死ぬと、南朝方の抵抗は終わりを告げ、菊池氏は再び祖先の土地である隈府周辺に閉じこもることになった。

文化的転回

1392 年、苦戦を強いられていた南朝方は敗北を喫した。勝利を確信した足利幕府は、弱体化した菊池氏に肥後国の守護職を維持させたが、一族の征服と栄光の時代は終わった。

その後菊池氏は幕府との関係を修復し、一時は、一族の当主が肥後国と隣接する筑後国（現在の福岡県南部）の守護に任命されるほど幕府の好意を得た。しかし、一族は政治的な野心を抱くよりも、文化的な目標に目を向けた。第 20 代当主の菊池為邦（1430-1488）と息子の重朝（1449-1493）は武士や町人の教育機会を拡大し、彼らの知的・精神的探求を奨励した。彼らの指導の下、菊池は仏教や儒教の学問の中心地となった。

衰退と没落

菊池一族の平和的な探求は、天下が武士団が対立する内乱状態に陥ったことによって覆された。15 世紀後半になると、足利幕府は地方の武将を中心とした勢力の台頭によって弱体化し、支配力を失いつつあった。小規模ではあったが、同じ動きが菊池でも起こっていた。長らく菊池氏に仕えてきた家臣一族が主人を追い出し、その権威に挑戦したのだ。

1504 年、これらの武士は菊池当主を倒し、家老の一人を当主にした。1500 年代半ば、菊池氏は残りの領地をライバルの大友氏に奪われた。1554 年、最後の当主であった菊池義武が死去し、菊池氏の家系は消滅した。

再評価

1800 年代に入ると、地元の歴史や過去の栄光に関心が高まり、菊池一族に再び光が当たるようになった。商人や地主など、菊池に住む裕福な人々は一族ゆかりの碑や墓の修復や再建に資金を提供した。

全国的な規模で菊池の遺産が再評価されるようになったのは、1868 年の明治維新の後である。明治維新は天皇の政治的支配権を回復し、約 7 世紀にわたる武家支配に終止符を打った。明治天皇（1852～1912 年）の新政府は 14 世紀の南朝の天皇が皇位の正当な保持者であるとし、南朝の盟主であった菊池一族は、新体制下で期待される君主への忠誠の模範として取り上げられた。著名な菊池当主は隈府にあった一族の居城の跡地に新しく建てられた菊池神社の祭神として祀られた。